

# 18世紀 知のトポス

——パリ・江戸二都物語——

岩 川 亮

はじめに

1. 絶対王政下の知的世界
2. アカデミーという制度と知的活動の舞台
3. 江戸の18世紀：武断政治から文治の時代へ
4. 江戸のサロン

まとめ

はじめに

カフェ文化は、今失われつつある。知的生産の場と生活の場との混合体、すなわちソシアールでコンヴィヴィアルなトポスは街なかには見出せないのか？（たとえば、今流行のスターバックスやドトール、ヴェローチェといったスタイルはフランスのカフェとはずいぶんかけ離れたものだ。）

今ある世界、それは、部屋に閉じこもってパソコンに向かい、あるいは携帯電話やスマートフォンで、見えない（肌を接していない／同じ雰囲気を共有していない／共食していない）世界と交流している現代の風景であり、最先端の精神世界である。

人々は、それぞれ異なる「お宅」世界を背後霊のように背負ったまま、街を歩き、バスに乗り、殆ど俯きながら小さな画面の向こうに全感覚を委ねているようだ。

20世紀末から21世紀に突入する世紀移行期、戦争の時代と言われた20世紀を総括することなく、なにやら激しい紛争やら混乱に見舞われながら、我々とはんでもない時代に迷い込んでいるような気がする。アメリカ一國支配の幻想は今や幻滅にかわり、パクス・アメリカナなどとほざいていた人々も今やその影すら見えなくなっている。

さて、この混乱から創造的時代を期待することはできないのか？ そんな淡い期待を抱きながら200年ほど前の時代をレトロスペクティブにながめてみれば、なにかヒントが得られるかもしれない。

ここでは、殺伐とした現代を超えて、18世紀のパリと江戸にタイムスリップし、その頃の人々の知的風景をスケッチしてみることにする。

「パリ・江戸二都物語」などと気取ってみたが、もとよりそのどちらの都市の専門家でもなく、歴史の知識も持ち合わせていないので、すべて借り物の紹介となることをお許し願いたい。

まずは時代背景をざっとおさらいしておく。

フランスの18世紀はロココの時代である。あるいは「啓蒙の時代」、「光の世紀」などと言ってもいい。世紀末1789年にフランス革命を控えているが、1715年に太陽王ルイ14世が没し、幼い曾孫のルイ15世が即位した。乱暴な言い方だが、これはバロックからロココへの転換と言ってもいいかもしれない。5歳かそこらの新国王が政治を司ることなどできず、ルイ14世の甥にあたるオルレアン公フィリップ(2世)が摂政として、その後見役を担った。その摂政時代をレジヤンスと言うが、その住まいがあったのがパレ・ロワイヤルである。これについては図をご覧ください。これに見られる通り、聊かいかかわしい雰囲気はただよっている。この辺りにはカフェもあったが、多くの娼婦が屯し、その名(ロイヤル宮殿)にふさわしくない風俗の巷であった。この辺りの事情については、今林さんの方からヴィジュアルな紹介がなされているので、皆さんもよくご理解していることとおもう。

パレ・ロワイヤルにあった有名なカフェとそこに出入りしていた人々は以下の通りである。

ラ・レジヤンス(1681～)

ヴォルテール、ルソーなど思想家、文人

フォア(1725～)

革命期はジャコバン派、第一帝政期は文人、芸術家

その他に、最初のカフェとして有名なプロコープ(1686～)があったが、これは現在でもレストランとして営業している。もともとフォセ・サンジェルマン街にあったもので、その前が劇場であったために役者が多く出入りし、ほかに文人や政治家も頻繁に会合したことは、今日でも店のディスプレイウィンドーに肖像画を展示して紹介している(現在の街路名であるリュ・アンシエンヌ・コメディとは「旧劇場街」の意であり、コメディ・フランセーズがかつてここにあったことを示している)。その顔ぶれを見ると、アメリカ独立運動に関わるベンジャミン・フランクリンや百科全書で名を馳せたディドロ、ダランベールなどもここに入出入りしている。その意味では、このカフェは18世紀の世界史的な大事件であるアメリカの独立とフランス革命の土壌ともいえるべき「知のトポス」と言ってもいい。フランスにおける最初期のカフェが思想の最前線を形成していたことを先ず記憶しておこう。

上記のカフェに出没していた文人というのは、『寓話』で有名なラ・フォンテーヌや劇作家のボーマルシェ、マリヴォーといった言わば文学者であるから、19世紀になってからよく話題になる文学カフェのはしりでもある。実際、ロマン主義の時代になると多くの文学者がカフェに屯し、文学論議に花を咲かせた。ただ、革命前の時代、すなわち、いわゆるアンシャン・レジーム下のカフェと19世紀後半のカフェでは客層が根本的に異なることを注意しなければならないだろう。イギリスに始まる産業革命がフランスで最盛期を迎えるのは、七月王政（ルイ・フィリップの治世）から1848年の二月革命を経てナポレオン3世が第二帝政を始めた19世紀の後半であり、この頃からブルジョアジーが時代の主役となって登場する。そうした市民階級がカフェを活性化させる上で重要な役割を果たしたことは当然である。そうであれば、革命前の社会における知のトポスはどのようなものであったのか。

## 1. 絶対王政下の知的世界

フランスがヨーロッパの文化国家になったのはルイ14世の時代であろう。自らを太陽に擬するこの国王は太陽王であり、フランスのみならずヨーロッパ全域に君臨した。そして、その威光を国境を越えて及ぼすべく、1661年の親政開始とともに（即位は1643年で、まだ5歳に過ぎなかった）ヴェルサイユ宮殿の造営に着手するが、その一方で1667年から始めた南ネーデルラント継承戦争をはじめとして次々と侵略戦争を進めた。死の2年前にユトレヒト条約によって孫をフェリペ5世としてスペイン王位に就けるまで、その治世は戦争に明け暮れたと言っていい。

一方、ヨーロッパに君臨するフランス文化の知的背景に目を向けてみると、例えば演劇を中心とする文学の領域では、一般に古典主義と言われる、ギリシア・ローマの古典古代に範をとる悲劇が最高位を占め、コルネイユ、ラシーヌが活躍した。これに喜劇のモリエールを加えたこの時代の演劇が現代フランスの演劇に至るまでフランス文学の伝統の柱になっていることは周知のことであろう。

## 2. アカデミーという制度と知的活動の舞台

現代における人間の知的活動の舞台はかなり複雑多様であるが、学校制度や各種学会等の学術団体、公的および私的研究機関など、社会的に明瞭に整備されている。そうしたものの代表としてアカデミーというもの、例えば日本の学士院のような制度は比較的明確にその存在が見て取れるものであるが、西欧の近代においてはどうかであろうか。

フランスの場合、アカデミーと言えばアカデミー・フランセーズということになるのだろうか。イギリスではロイヤル・ソサイエティであり、その設立は1662年のことである。それに対応するフランス側の制度は、イギリスよりわずかに遅れて1666年に設立されたパリの科学アカデミーであろう。いずれの機関も国家が関わっている国の制度である。絶対王政とその宮廷が威信をかけて

築いた近代科学の礎であった。

こうした知的制度と平行して、宮廷においてはいわゆる宮廷文化が花咲く。ヴェルサイユ宮殿は単なるバロック建築ではなく、その内部において政治が展開される舞台である。パリから離れたこの宮廷に貴族を住ませ、国王を主役とする祝祭的政治ショーが繰り広げられた。「王の午餐」や王が踊る「宮廷オペラ」に見られるように、ここでは、統治される民衆ではなく宮廷政治に参画する貴族が観客となって劇場政治が日々上演されるのであった。それを支えたのが古典主義演劇であり、バロックオペラやリュリーの音楽である。

ヴェルサイユの宮廷ではこのように政治と宮廷生活が一体化し、民衆の生活の場であるパリから隔離された形で国家が運営されていた。これが17世紀のひとつの知的トポスである。

このいわば公的な学術機関とヴェルサイユの劇場の宮廷政治が絶対主義国家のひとつの知的な側面であるとしても、それを支えた背景として、パリの内部に開かれた貴族のサロンにも目を向ける必要があるだろう。後の時代のカフェに繋がる雰囲気醸し出す知的トポスとしてのサロンである。一方では、王国にとどめを刺す毒をはらんだカフェに対して、アカデミーへの知的栄養を供給する貴族のサロンという構図も描くことができるかもしれない。高貴な夫人のサロンに出入りする文人、学者は、一方では街のカフェに集い、知識と思想に彩られた革命の空気を鼓吹する。国家的儀礼に縛られたアカデミーにはない談論と共食のコンヴィヴィアルな雰囲気がここには醸成されて行く。

たとえば18世紀にはいって、ルモニエ描くところのジョフラン夫人のサロンの賑わい。これは19世紀になってから描かれた想像風景であるが、背景にヴォルテールの胸像が置かれ、中央のテーブルでランベールがペンを走らせる。画面右手は主役のジョフラン夫人。その背後にモンテスキューが座り、左手にはピュフォンやルソー。デイドロも横向きに頬杖をついている。最後列には経済分野のケネーやチュルゴー、それに作曲家のラモーが控えている。そして、男たちに混じって貴族の夫人が談笑している光景。

勿論、ジョフラン夫人のサロンに一時にこれらの知識人が一堂に会したわけではないが、貴族のみならずブルジョア階級の夫人たちもこうしたサロンを競って開き、それぞれに知識人を集めていた。これらのサロンは、ヴェルサイユの宮廷の祝祭的・儀礼的空間とは異なり、アンチームな雰囲気に満ちていた。ランベール夫人のサロンでは文学や哲学についての議論が展開され、モンテスキューもこれに加わった。リベルタンと呼ばれる自由思想家が集まったタンサン夫人のサロンや外国人も加わったというデファン夫人のサロン、というようにサロンの主催者は夫人である。もちろん、ドルバック男爵のように男性が主催するものもあったが、これも、おもてなしの主役は夫人であった。



「ジョフラン夫人のサロン」(部分) ルモニエ画 (ルーアン美術館)

ところで、サロンの自由な知的世界の方で、18世紀のもう一つの側面であるロココ美術についても一瞥しておくことも必要であろう。フランスのロココ美術と言えば、ワトーやブーシェといった画家が浮かぶ。それを別の表現で言えば、聊か独断的ではあるが「雅なる宴」と「寝室の裸婦」ということになろうか。『シテールへの船出』や庭園での宴の絵画に見るように、そこに醸し出された男女の親密な語らいは、この時代の風俗の主調である。儀礼的な宮廷恋愛ではなく、自由な社交としての男女の愛。ルイ14世の時代には、庭園での祝祭が貴族の社交の場であったが、ロココの時代の庭園では、三々五々男女がそれぞれに愛を語らい、音楽を奏でるのである。

18世紀は女性の時代である。ロココの優美な装飾に彩られた華麗な時代、女性たちは寝室 (bou-doir) にまで親しい客を招き入れた。親密さの極致である。アンチームでソシヤブルな時代と言っていいだろう。こうして、ルイ15世の時代は、近代人にとっての新たな「開かれた」絆の時代へと進んで行くのである。

(その後フランス革命の混乱を経てナポレオンの帝政期に至るが、この帝政期においても、その女性ファッションに見られるように、女性をアンチームに描く傾向は続く。そして、19世紀はまさにブルジョアジーの時代であり、サロンに変わってカフェが時代の主役となる。)

### 3. 江戸の18世紀：武断政治から文治の時代へ

次に、同時期の日本の社会に目を転じて、その知的社会を検討する。時代としては元禄（1688～1703）、すなわち将軍綱吉の時代からということになる。徳川幕府初期のいわゆる武断政治から文治に移行する時期、既に4代家綱の時に文治への転換は始まり、5代綱吉は湯島聖堂を建設するなど学問の奨励をしている。孔子廟における儒学講義が公的な形で実施されることになる。

徳川家宣、家継の時代、新井白石のいわゆる正徳の治を経て、次の8代将軍吉宗の時代（1716～45）になると、1722年に出版統制が実施されるが、これは、元禄町人文化において栄えた浮世草子などの好色物を絶版にするものであった。

いわゆる享保の改革である。西鶴の好色物は男性が強い時代の産物であり、その時代が終わって女が強くなる時代になったという指摘をする研究者もいる。そうするとこれは江戸ロココと言ってもいい。これ以後浮世草子は衰退し、社会世相的にも女性の時代に傾きかけたということであろう。実際、武芸奨励、質素儉約は吉宗のキャッチフレーズであり、その裏には武士の籬が緩んだ状況が想像できる。もちろんそれだけでその時代の社会をトータルに規定することはできないが、一面ではフランスのロココに対応するような時代が江戸にもあった。同じような士風の改善や風俗統制は後の寛政改革でも叫ばれていることからすると、こうした女性化傾向は江戸時代の底流として文化文政の頃まで続くと考えていい。

松平定信による寛政の改革は将軍家斉の時代である。フランスのルイ15世は *Bien aime*（最愛の）と形容されるほどの好人物であったようであるが、政治には無関心であった。一方、家斉は側室15人を抱え、男子19人、女子27人の子をなしたという。化政期の文化などというが、これが家斉の時代であった。寛政の改革では、奢侈禁止や混浴禁止などの風俗統制や洒落本、黄表紙の禁止といった出版統制がなされたが、定信が去って後のいわゆる大御所政治は放漫なものであった。

### 4. 江戸のサロン

江戸時代の学問や文化、とくに18世紀を中心とした知のトポスはどのようなものであったか。

公的には、多くの藩に藩校があり、江戸には幕府肝いりの湯島聖堂があった。これらは武士の学問所であるが、そのほかに私塾と呼ばれるものもある。ひとくくりに儒学というが、勿論それだけではないだろう。農学や本草学、天文学（暦学）などもある。蘭学や洋学もはいつてくる。その制度的側面については深く検討しなければならないが、ここでは、「物産会」「薬品会」などの名称で知られる知識人の集まりや、文人のサロンの会合について素描する。

#### 「薬品会」

明の李時珍による『本草綱目』が渡来したのは江戸の初め、慶長12年（1607）のことである。

本草学とは博物学のようなもので、自然誌といってもいいが、自然物に関する膨大な知識を分類し、系統的に記述したものである。李時珍の著作は、長い歴史を持つ中国本草学を集大成したもので、1596年に刊行されたばかりであった。これに触発されるように1612年には林羅山がその抜粋『多識編』を編み、各種の農書、本草書も刊行されるようになる。貝原益軒の『大和本草』が出たのは李時珍の刊行から約百年後の宝永10年（1709）、その4年後には寺島良安が『和漢三才図会』105巻を刊行した。

江戸以前の歴史も含め、日本の博物学は中国の本草学から十分な栄養を汲み取りながら、18世紀に至って花開いた。

平賀源内（1728～79）が活躍したのはそのような時代である。彼は、讃岐から長崎に遊学して医学を学んだ後、「花のお江戸」にまで足を伸ばした。知識欲の塊ともいべきこの江戸のルネサンス人は真のアンシクロペディストであり、興行師（人が自分を山師と見ていることを嘆いてもいる）であった。本草学の師である田村藍水に勧めた江戸で初めての「薬品会」を湯島において開催したのが宝暦7年（1757）のことであるが、これを、多くの人を集め、親しく知識を交換するソーシャルな知のトポスの形成と見ていいのではないか。

この「東都薬品会」の開催にあたり、源内は引札（広告チラシ）を作り、江戸町人の知識欲を刺激した。諸国から集めた珍品・物産に人々も群がって来る。

5回にわたって開催された「薬品会」の出品物は、源内によって選別され、『物類品隣』にまとめられたのであるが、博物学史上重要なこの著作はさておき、ここでは、知識を広めるだけでなく、人を集めて知識の交流を図るその方法にこそ注目する必要がある。実際、源内の周囲には多方面の知識人が集まっていたようで、これも後世の作品であるが『鳩溪平賀源内君一百回忌』なる涅槃図を模した源内交遊図には、交わった人物のみならず動物までが描かれ、漫画的描写の中にその豊かな社交精神を醸し出しているようである。

こうした博物学の領域での知的交流のもう一つの例として、いわゆる「おらんだ正月」を見てみよう。

ここに「芝蘭堂新元会図」（早稲田大学図書館蔵）というものがある。寛政6年（1794）閏11月11日に大槻玄沢が友人を招いて開いた新年会の情景を市川岳山が描いたのだが、この日が太陽暦の元旦に当たり、西洋に倣ったという意味合いで一般に「おらんだ正月」と呼ばれる所以である。三台の座卓を並べ、その周囲を29人の招待客が囲み、談笑している。勿論酒のようなものもあるが、瓶の形からしてワインのようである。事実ワイングラスも添えてある。招待客に坊主頭の法体が多いのは医者が多いということであり、背景の壁にはヒポクラテスらしい肖像がかかっているのもその所為であろう。つまみが何かはわからないが、スプーンやナイフがあることからして西洋風のものかもしれない。掛け軸に描かれているのは「ウニコウル」（unicorn）と呼ばれていた当時話題の珍獣イッカク（一角）で、角のように見えるその変形前歯の牙が漢方薬であった。

ほかの人物としては、紙に鵝ペンでロシア語らしき文字を書き示しているのが、かの大黒屋光太

夫であり、その隣の黒羽織姿は万蔵すなわち森島中良（幕府奥医師桂川甫三の次男で桂川甫周の弟、『紅毛雑話』を著すなど多彩な活動をした）、右手にただひとり椅子に座っているのは「蘭癖」大名として有名な島津重豪。洋装で長煙管と洒落込んでいる。左の背景には「蘭学会盟引」なる漢文の趣意書が掲げてある。



「おらんだ正月 芝蘭堂新元会の図」市川岳山筆（早稲田大学図書館）

このおらんだ正月は天保8年まで44回開かれたと言われ、科学者サロンの様相を呈していた。酒食をともにしながら談論風発の情景は、知識というものがコンヴィヴィアルな雰囲気の中で活性化しながら行き渡っていくことを示している。

芝蘭堂新元会のおらんだ正月に登場した森島中良の父、桂川甫三は幕府奥医師という公的な地位の人物であったが、酒好きで、その立場から西欧先進科学情報に精通し、そのために多くの知識人がその周囲に集い、その出会いはこれもまたサロンと言っていいものであった。実際、この時代、吉宗の享保改革による実学書輸入の許可もあって、海外情報はそれまでよりも格段に多くもたらされていた。それが背景となって、従来のオランダ語を介したものから直接接触による海外情報が増加し、蘭学の時代から洋学の時代へと移行する状況が生まれたのであろう。



## 文人サロン

揖斐高は次のように指摘している。

すなわち、「文人」とは、知識人の東洋的な一つのあり方であり、武人に対し、文事に優れた文徳のある人で、享保の頃に登場した。ということは吉宗の時代ということになる。人物としては、服部南郭、祇園南海、柳沢淇園などに始まるが、その特徴を箇条書き的にまとめれば以下のようになる。

- ① 読書人、高度の知識人
- ② 政治権力に直接関わらない
- ③ 詩文書画など古典の文学・芸術に通ず、多芸多才
- ④ 世俗的価値基準よりも自己の内面的精神生活を重視、
- ⑤ 反俗的、隠逸的、尚古的姿勢

これは個人のレベルでの文人評価であるが、グループとしてのありかたはどうであろうか。

こうした文人が集まった文人サロンとしては、上記に取り上げた蘭学・洋学サロンの科学的進取性、知識欲旺盛な性格とは裏腹に、どちらかという遊びの要素が強いように思われる。上記に指摘されているように、そのはじめは服部南郭や祇園南海のような詩人の漢詩サロンであったし、後に現われる宿屋飯盛や大田南畝の狂歌サロンに漂う空気は、固定化した武士社会の枠組みの中で閉塞感に包まれた知識人の逃避的「遊び」の雰囲気 را 帯びている。

勿論、ひとりひとりの精神自体は簡単には推し量ることができないが、集団としての文人サロンは、俗世間における身分や地位や金銭を超越した精神的共同体として、成熟した百万都市江戸の社会の地縁血縁共同体から解放されてはいるわけである。それにもかかわらず、それは、新たなソシアビリテ（社会的結合）を「知的交遊」の遊びに求める人々の集団である。

概括的に述べれば、こうした文人サロンは、儒学、漢詩文、和歌、国学といったジャンルを知的遊戯の対象とした古典的サロンと、蘭学、洋学、科学技術を対象として知識を探求する目的の異国的サロンに大別され、両者の性格は異なるように思われる。封建社会末期の固定身分に縛られた社会にあって、遊びに逃避する集団と、鎖国下のガラパゴス化した知識社会にあって、未知の情報の探求に燃える集団の違いであるが、サロンという呼び名によって共通にくることができるのは、遊びにしる真面目にしる知的好奇心に裏付けられていることである。それに加えてコンヴィヴィアリテという要素を加えるならば、その視点からもサロンの性格を幾分身体論的に捉え直すこともできるだろう。

## 『木村蒹葭堂のサロン』

木村蒹葭堂のサロンと著者が言っているものは江戸ではなく大阪にあったものである。この著作自体は、平成7年から10年にかけて雑誌「新潮」に連載され、平成12年に単行本にまとめられた。これ以前に中村は『頼山陽とその時代』と『蠣崎波響の生涯』を書いており、この三部作によって江戸後期の知識人のあり方を実証的に検証した。本来小説家であるからロマネスクな作品がその仕事の中心であるが、数多くの小説や文学批評を脇に置いてこのような評伝的な著作をものした背景には、著者自身の精神的危機やこの国の知的社会のあり方に対する反発のようなものもあったようである。それは、中村自身の居心地の悪さでもあったようだ。

この三部作において、中村は、ホモ・サピエンスとしての頼山陽、ホモ・ファーベルとしての蠣崎波響、そしてホモ・ルーデンスとしての木村蒹葭堂を取り上げ、それぞれ、認識、芸術、遊びの側面から知識人のあり方を検討しているようである。

[シンポジウムでは時間の制約もあって木村蒹葭堂については殆ど紹介できなかった。それに加え、筆者の怠慢を告白しなければならない。この三部作については、その後も綿密に検討する余裕がなく、シンポジウムの際と同様に、考察中であることだけを報告しておきたい。]

## まとめ

ソーシャルな場として機能した18世紀フランスのサロンやパリのカフェ、あるいは江戸の文人サロン（薬品会、物産会、狂歌／書画交換会等）に比べ、現在の交流、情報交換、「社交」ツールとしてのインターネットやツイッター、フェースブック、ラインといった情報ツールはソーシャルリテやコンヴィヴィアリティの有効な手段になりうるか？

姿も顔も見えない人間を結びつけるらしいソーシャルメディアは、今や民衆を結集して革命の道具になり、その手段を提供している企業は巨万の富を集めている。現代社会は高速情報通信を手段として世界を一体化する。グローバリゼーションである。

機械文明が発達し、工業化社会が出現したとき、人々は「人間疎外」という問題を叫んでいた。筆者が中学生のときに最初に読んだ岩波新書のタイトルは『科学史と新ヒューマニズム』というものであった。歴史は繰り返す。私たちは機械文明の進歩に否が応でも順応しなければならないのだろうか？

## 参考文献

- 揖斐 高 (2009) 『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』  
今田 洋三 (2009) 『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』

- 海野 弘 (2009) 『酒場の文化史』
- 下田 淳 (2011) 『居酒屋の世界史』
- 鈴木 俊幸 (2007) 『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』
- 鈴木 俊幸 (2010) 『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』
- 中村真一郎 (2000) 『木村蒹葭堂のサロン』
- 田中 優子 (1986) 『江戸の想像力 18世紀のメディアと表徴』
- 田中 優子 (1993) 『江戸はネットワーク』
- 川添 裕 (2000) 『江戸の見世物』
- 中野 三敏 (1992) 『江戸文化評判記 雅俗融和の世界』
- 森 銚三 (1978) 『おらんだ正月 江戸時代の科学者達』
- 中川 久定 (1991) 『アイドロ、18世紀のヨーロッパと日本』
- L.メルシエ (1989) 『十八世紀パリ生活誌 タブロー・ド・パリ』
- 菊盛 英夫 (1980) 『文学カフェ プルジョワ文化の社交場』
- 渡辺 淳 (1995) 『カフェ ユニークな文化の場所』
- 山口 俊章 (1978) 『フランス一九二〇年代 状況と文学』
- 矢島 翠 (1981) 『パリ 1930年代 一詩人の回想』
- 飯塚 信雄 (1986) 『ロココの時代 官能の十八世紀』
- 平田 達治 (1996) 『ウィーンのカフェ』
- 森本 哲郎 (1998) 『世界の都市の物語 ウィーン』
- H. クロイツ (1983) 『キャバレーの文化史』
- M.Grotz et M.Maire (1949) *Salons du XVIIIeme siecle*
- J.Herissay (1936) *Scene et Tableaux du regne de Louis XV*

